グローバル都市マニラと都市底辺層（４）

スクオッター強制撤去・再居住・階層分化

北海道大学　石岡丈昇

本報告では昨今のマニラで頻発するスクオッター住居の強制撤去を取り上げる。とりわけ、それが都市底辺層の階層分化をもたらす点を論じる。都市底辺層の構成がマニラのグローバル都市化に根ざしている点は、私たちの共同報告で一貫して保持される論点である。本報告では、グローバル都市化の過程でマニラの下層労働市場に包摂された都市底辺層が、再びそこから放出される過程として、スクオッター住居の強制撤去が位置づくことを述べる。

スクオッター住居の強制撤去は、ここ 10 年ほどのあいだに一気に増加した。2002 年には 1043 世帯だったのに対し、2011 年はその 14 倍に該当する 14744 世帯が撤去を受けた（Urban Poor Associate のデータ）。こうした強制撤去の増加の背景には、マニラの中心部での土地接収の圧力が強まっている点がある。多国籍企業による高層ビルやコンドミニアム開発のために、スクオッター地区が撤去の対象となる。撤去の対象となった住民はさまざま手段を用いて阻止しようとするが、最終的には警察や特殊部隊による実力行使で撤去が実現されることが多い。その後、かれらは政府（国家住宅庁）が用意した再居住地―マニラ中心部から 30 キロほど離れたリモートエリア―に送られる。

本報告は、現地でのフィールドワークに基づき、強制撤去から再居住地への移行過程を捉える。強制撤去は単に住宅を破壊するだけでなく、かれらの生活世界そのものを解体する。再居住地周辺には労働機会がなく、かれらは片道 3 時間以上をかけてマニラまで通勤しなければならない。その交通費を捻出することができないために、世帯の主たる稼ぎ手はマニラに単身で残り（知り合いの家に居候するか平日のみの野宿者になる）、再居住地には多くの場合、妻子のみが残される。彼女たちもまた、スクオッターに居住していた際に存在したさまざまな社会関係から引き剥がされ、あらゆる家事労働を一手におこなう。強制撤去は、労働・居住・家族構成といったあらゆる事態を一変させる。それは、住民を慣れ親しんだ世界から引き剥がし、別の世界へと移植するものである。

このように強制撤去は「故郷喪失者」を生み出すが、そのことの含意を捉えるために、本報告では次の二点を強調したい。第一に、今日のスクオッター住民はマニラの労働市場の末端を構成する労働者である点である。これはかつてのように都市雑業―廃品回収や洗濯屋に代表される―を生業にしていた時代とは大きく異なる。労働市場の相対的外部に位置していた「都市雑業層」の時代とは異なり、今日ではその内部へと包摂された「都市底辺層」が、強制撤去によって、都市外へと空間的に追放されるのである。第二に、都市の階層構成と空間構成が連鎖している点である。都市底辺層は都市外へと追放され、中間層以上が都心に回帰するパターンが生じてきている。この点は、昨今の都市研究で言及される「階級＝空間連鎖（the nexus of class and space）」とも関係する。これらの点に焦点化しながら、都市底辺層が根こぎにされる事態を跡づけるのが、本報告である。